

大学学部生による日本語教育実習実践報告 —キャリア教育の観点から—

中村香苗 / Nakamura, Kanae

淡江大學日本語文學系 助理教授

Department of Japanese, Tamkang University

【摘要】

本論文為筆者在淡江大學開授的日語教育實習課程的實踐報告。此課程乃本校日文系學生畢業專題的選項之一。畢業專題的主要目的，在於發展學生在各類職場所需要的「技能」（competencies）。為了達成此目標，學生必須從零開始，自力設計與實行一門日語入門課程。根據一學年間學生的 SNS 互動資料分析顯示，學生們自主行動的技能有顯著的發展提昇。此外，課程訓練後的問卷也驗證了，這樣的教育訓練課程，可正面增進學生在「與他人互動、時間管控、組織能力、創意」等方面的技能。

【關鍵詞】

日語教育訓練、畢業專題、實際技術訓練、技能

【Abstract】

This study is a practice report of a Japanese language teacher training course offered by the author at Tamkang University. The course is one of the senior students' graduation projects in the Department of Japanese. The main goal of the projects is to develop "competencies" that are applicable to various working areas. To fulfill this goal, the students are required to design and administer an introductory Japanese course. The analysis of the students' interactions through SNS throughout the academic year shows gradual development of their competency of acting autonomously. Moreover, the post-training questionnaire proves that this teacher training course has good effects on improving the competencies of interacting with others, managing time, organizing things, and creating new ideas.

【Keywords】

Japanese language teacher training, graduation projects, training of
practical skills, competency

1. はじめに

本稿は、淡江大学で筆者が 2013 学年度より担当している、大学 4 年生を対象とした日本語教育実習課程の実践報告である。本課程は、初中等教育の教員免許取得を目的とした教員養成課程の一貫の実習ではない。当大学日本語文学科で、4 年生が 1 年間かけて取り組む「卒業制作プロジェクト」の一つに位置付けられている。本卒業制作プロジェクトは、キャリア教育としての技能実践学習を目的に発展してきた。そのため本稿で報告する実習課程は、日本語教師としての教授技能を磨くことだけではなく、卒業後どんな分野の職業に就いても生かせる「コンピテンシー」育成を念頭においた課程内容を特徴としている。具体的には、実習生自らがゼロから初級日本語コースを立ち上げ、学習者募集から事務連絡、カリキュラム設計まで全てに携わる内容になっている。

現在、グローバル化、少子化が急速な勢いで進んでいる台湾の日本語教育が置かれている状況は、大変厳しいものである。高等教育機関でも、卒業後の進路選択を有利にするカリキュラム開発が喫緊の課題であろう。曾・落合（2012）が主張するように、キャリア教育はその課題に対処する一つの鍵となる。次節では、淡江大学日本語文学科の卒業制作とキャリア教育の主要概念である「コンピテンシー」について概説し、3 節で日本語教育実習課程の内容を記述する。4、5 節では、実習生の SNS 使用状況と実習後のアンケートを元に、キャリア教育の観点から見た実習成果を考察する。6 節では、学部生に対するキャリア教育、及び卒業制作としての日本語教育実習の可能性と課題を論じ、結論とする。

2. 淡江大学日本語文学科の卒業制作とキャリア教育

淡江大学日本語文学科の卒業制作は、1998 学年度より「卒業論文執筆及び指導（卒業論文寫作與指導）」という科目名で、論文か報告のどちらかを 1 年かけて完成させるという形で始まった。2005 学年度以降、卒業生の進路選択の多様化に応じて、「卒業制作及び指導（卒業專題寫作與指導）」という新たな科目名のもと、翻訳や映像制作、雑誌編集、旅行ガイド実習、演劇、ディベート、日本語創作と、次第に選択分野が増えていった。本稿で報告する日本語教育実習は、2013 学年度に追加された一番新しい分野である。4 年生は「卒業制作及び指導」課程で日

本語のアカデミックライティングを学びつつ、各分野を担当する指導教師の指導のもと自身が選んだ分野の課題や題目に1年間取り組む¹。また、映像制作や旅行ガイド実習等いくつかの分野では、指導教師が担当する「会話四」を履修することが条件となっており、日本語教育実習もその一つである²³。さらに日本語教育実習の場合は、3年生を対象に開講されている筆者担当の「日本語教授法（日語教授法）」を少なくとも1学期間履修、或いは聴講することが求められている。

本卒業制作は、1998年度の開始当初はキャリア教育を意識してデザインされたものではないが、現在に到るまでに社会人として必要なスキルや能力の基礎訓練となるような形に発展してきた（曾・落合 2012：31-32）。具体的に言えば、キャリア教育における「コンピテンシー」の総合訓練である。

今日、高等教育で用いられる「コンピテンシー（コンピテンス⁴）」という概念は、もともと1970年代にアメリカの外交官選考方法の発展の中から生まれたもので、「特定の職務を遂行し、高い水準の業績を上げることができる個人の特性」（松下 2007:102）と捉えられている。90年代以降、企業が成果主義を導入し始めた日本や高等教育改革の進む欧米でも、この概念が取り入れられるようになった。また近年では、OECD（経済開発機構）のDeSeCo（Definition and Selection of Competencies）プロジェクト⁵により、従来の学力到達テストのよる評価とは別に、初中等教育におけるコンピテンシーの重要性も注目されている（松下 2007:102）。

¹ 予め指導教師が定められている分野と、論文や報告、翻訳、創作のように題目や本の内容に合わせて各自で指導教師を見つけなければならない分野がある。

² 当校日本語文学科の「会話四」授業は、「ビジネス会話」や「プレゼンテーション」、「グループディスカッション」、「異文化間教育」、「観光ガイド」など様々な主題が設定されており、学生は各自興味のある主題の授業を履修することができる。

³ 淡江大学での卒業制作実施方法に関する更なる詳細は、曾・落合（2012）を参照されたい。

⁴ 松下（2007）では、「コンピテンシー」ではなく「コンピテンス」という語を使用している。一般的に、前者は個別具体的な概念、後者は総称的概念として使い分けられるようだが、邦訳では「コンピテンシー」で統一される傾向があるため、本稿でも「コンピテンシー」を用いる。

⁵ DeSeCo Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations. <http://www.deseco.admin.ch/>（2015年4月3日閲覧）

工藤 (2011:2-5) が『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして⁶』をもとにまとめた DeSeCo プロジェクトの概説によると、コンピテンシーとは「人生の成功や社会の良好な働きに貢献する」ものであるとしている。また、プロジェクトでは近年企業で「仕事ができる」と言われる人には、次の 3 つの特性があることを明らかにしている。

- (1) 異文化での対人関係の感受性が優れている。外国文化を持つ人々の発言や真意を聞き取り、その人たちの行動を考える。
 - (2) 他の人たちに前向きの期待を抱く。他の人たちにも基本的な尊厳と価値を認め、人間性を尊重する。
 - (3) 人とのつながりを作るのがうまい。人と人との影響関係をよく知り、行動する。
- (p. 2)

これらの特性を参考に、OECD がこれまでの様々な研究の成果を整理し、成人の能力概念として定義したのが、表 1 で示す 3 つの「キー・コンピテンシー」である。さらに各キー・コンピテンシーには、関わりの深いコンピテンシーが 3 つずつ定められている。

表 1 DeCeCo プロジェクトで定義されたコンピテンシー

キー・コンピテンシー	関連するコンピテンシー
(1) 自律的に活動する力	1) 大きな展望、あるいは文脈の中で行動すること 2) 人生計画と個人的なプロジェクトを設計し、実行する力 3) 自らの権利、利益、限界、ニーズを守り、主張する力
(2) 異質な集団で交流する力	1) 他者とうまくかかわる力 2) 協力する力 3) 対立を処理し、解決する力

⁶ドミニク・S・ライチェン、ローラン・H・サルガニク編『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』立田慶裕監訳 明石書店

(3) 道具を相互作用的に用いる力	1) 言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する力 2) 知識や情報を相互作用的に活用する力 3) 技術を相互作用的に活用する力
-------------------	--

工藤（2011：2-5）を参考に作成

一方、松下（2007）では、ヨーロッパ各国の大学がコンピテンシーを中核にすえてカリキュラム改革に取り組んだ Turning Project を紹介し、その中で道具的、対人的、及びシステムのコンピテンシーの3カテゴリに分類された30の一般的コンピテンシーを報告している。これら3つのカテゴリと OECD のキー・コンピテンシーとの関連を見ると、以下のように対応していると捉えることができる。

- 1) 道具的コンピテンシー = 道具を相互作用的に用いる力
- 2) 対人的コンピテンシー = 異質な集団で交流する力
- 3) システム的コンピテンシー = 自律的に活動する力

曾・落合（2012：38-39）は、Turning Project で定められた30の一般的コンピテンシーが淡江大学の卒業制作において、どの程度訓練できるかを評価し表2のようにまとめている。

表2「卒業制作及び指導」実施と Turning Project コンピテンシーとの関係

分野	道具的コンピテンシー	対人的コンピテンシー	システムのコンピテンシー
	○分析と総合の能力 ○組織化とプランニング能力	△ 批判的・自己批判能力 ○チームワーク （映像、雑誌、ガイ	○知識を実践に適用する能力 ○リサーチのスキル ○学習する能力

能力項目	○基礎的な一般知識 △ 職業の基礎知識の習得 ○母語の話し言葉・書き言葉によるコミュニケーション能力 ○第二言語の知識（日本語、英語） ○基礎的な計算技能（図表と統計処理） ○情報処理スキル ○問題解決 ○意思決定	ド、劇、ディベート） ○対人スキル ×学際的なチームで働く能力 △他分野の専門家とコミュニケーションする能力 △多様性と多文化性を認めること △国際的な場面で働く能力 ○倫理的な関わり（責任感、スケジュール管理、困難克服）	○新しい状況に適応する能力 ○新しいアイデアを生み出す能力 ○リーダーシップ（映像、雑誌、ガイド、劇、ディベート） ○他国の文化と習慣の理解 ○自立的に働く能力 ○プロジェクトのデザインと運営 △イニシアティブと企業家精神 ○質への関心 ○成功しようとする意思

注：○該当する、△やや該当する、×該当しない/（ ）内は補足説明

出典：曾・落合（2012：38）

しかし、曾・落合が調査した時点では、日本語教育実習はまだ卒業制作に加えられておらず、またそれぞれの分野でどのコンピテンシーがどの程度訓練できるのかも一様ではない。（例えば、表2の「チームワーク」や「リーダーシップ」は、団体で取り組む映像制作、雑誌編集、ガイド実習、演劇公演、ディベートに当てはまるコンピテンシーだと判断され、論文、報告、翻訳は含まれていない。）そのため、筆者は上記の表を参考にアンケートを作成し、教育実習終了後に実習生自身がどのようなコンピテンシーの訓練になったと実感しているかを検証した。次節では、教育実習過程のカリキュラムとコンピテンシーとの関連を概説し、5節でアンケートの結果を論じる。

3. 卒業制作「日本語教育実習」とコンピテンシー

2012年の段階で、台湾の（応用）日本語学科系の学部レベルにおいて、日本語教師養成の専門科目を設けている大学は23校ある（呂 2012）。呂は、銘傳大学応用日本語学科の「日語教學法」を例に、理論と応用、専門と日本語をバランス良く伸ばすことを目指したコース・デザインを提案している。呂は授業実践報告のまとめとして、「第二外国語としての初級日本語学習者を相手に教える機会を作ること」（p. 141）が課題であり、それにより「即戦力のある人材を育てるという本コースのような職種別専門教育の目指す最終目標により近づくことができる」（p. 141）と述べている。筆者も淡江大学で3年生を対象に「日語教授法」を開講しているが、呂同様、兼ねてよりこの授業を履修した学生に、さらに実践を積む場が提供できないかと考えていた。そうした思いから開設したのが4年生向けの日本語教育実習である。しかし、台湾の教育機関で専任として日本語教師の職を得るには、たいがい修士号か教職免許が必要とされる。日本語の学士号だけでこの世界に入るのはなかなか難しい。そのため本教育実習では、即戦力のある日本語教育人材を育てるというよりは、むしろ卒業後様々な職種に応用可能な能力、すなわちコンピテンシーの育成に主眼をおいている。以下に課程内容を概説する。

前節で述べたように、本教育実習は筆者が担当する「会話四」として開講され、そこで実習に必要な準備や訓練、反省等を行った。前節の脚注2で説明した通り、「会話四」は各クラスが独自の主題に基づいてデザインされているが、読者の中には「日本語教育実習」という主題が「会話四」の教育目標にそぐわないと思われる方もいるであろう。学科が設定した2013年度の会話四が目標とする核心能力は、以下の5つである。

- 1 具備日語聽講的基礎能力（日本語聴解・会話の基礎能力）
- 2 具備日語口語表達、中日口譯的基礎能力（日本語口語表現と中日通訳の基礎能力）
- 3 具備閱讀日語書報雜誌的基礎能力（日本語書物・新聞・雑誌の基礎読解能力）

4 培育日本歴史、文化、社會的基礎素養（日本の歴史・文化・社会の基礎素養）

5 訓練思考判斷的能力（思考判断能力）

授業の詳細は後で述べるが、1～3 の核心能力に関しては、コース全般を通して日本語教育関係の文献を日本語で読み、授業中の討論を全て日本語で行うことでそれらの能力が培われる。5 も、学生が主体的に教案を設計していく過程や実習授業の検討・反省を通して思考判断能力の訓練となる。一方、4 に関しては、就職準備として教育理念を書く授業の中で日系企業の就職活動事情に触れるなどシラバスを工夫したが、やはり他の 4 つの核心能力に比べると比重が低いことは否めない。しかし、2014 年度のカリキュラムでは、実習生が教える授業を日本文化に重点をおいた学習内容に変えたり、就職準備のための授業時間を増やしたりすることで、大幅に改善されている。

2013 学年度の実習履修者は 11 名であった。授業は週 2 時間、第 1 学期 18 週、2 学期 14 週であったが、試験週や祝日等を除いた実質授業数は 1 学期目 16 回、2 学期目 11 回であった。表 3 は、通年のカリキュラム一覧である。

表 3 会話四（日本語教育実習）の課程内容

	授業内容
第 1 学期 9 月（第 1～2 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●コース説明 ●日本語教師の心得教授
10 月（第 3～6 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●カリキュラム、シラバス、教授法に関する講義 ●授業見学 ●初級日本語コースカリキュラム作成 ●担当課の決定、及びグループによる教案・教材作り
11 月（第 7～10 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●グループによる担当課の教案・教材作り ●カリキュラムの全体調整

	<ul style="list-style-type: none"> ●仮教案の修正 ●模擬授業
12 月（第 11～14 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●模擬授業 ●生徒募集の方法決定、生徒募集開始
1 月（第 15～16 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●第 12 課担当者による模擬授業 ●教案最終調整 ●コース総括
第 2 学期 2 月（第 1～2 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●今学期の予定、実習の注意事項確認 ●次週の実習内容の最終確認
3 月（第 3～6 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●前週の実習の反省 ●次週の実習内容の最終確認
4 月（第 7～9 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●前週の実習の反省 ●次週の実習内容の最終確認 ●教育理念の書き方 ●実習報告（卒業制作）の書き方指導
5 月（第 10～11 回）	<ul style="list-style-type: none"> ●実習報告の書き方指導 ●教育実習課程全体の反省

第 1 学期目には、主に日本語初級のコース設計、教案・教材作成、模擬授業というように、準備や練習を中心に行った。第 2 学期目には、実習用の初級日本語コースが同時進行で開講されたため、会話四では前週の実習授業の反省と次回授業の確認が中心であった。さらに初級日本語コース終了後は、就職活動を念頭において各自の教育理念を考え、卒業制作の作品となる実習報告及び DVD 作成に取り組んだ。このような形で開講された実習用初級日本語コースの概要は、図 1 の通りである。

図 1 実習生による初級日本語コースの概要

学習者：	淡江大学日本語学科以外の学生 20 名 ⁷
授業期間：	2 月の 4 週目から 6 週間（全 12 回）
授業日：	毎週 2 日、18:00-20:00
場所：	淡江大学
課程内容：	1～2 課 50 音、あいさつ、数字 3～4 課 ～は～です、指示詞こ・そ・あ 5 課 1～4 課の復習、コミュニケーション活動 6～7 課 形容詞現在形、あります・います 8～10 課 動詞現在形・過去形 11～12 課 形容詞過去形、まとめのコミュニケー ション活動

通常、台湾の高等教育機関における日本語教育実習と言えば、教職課程の一貫として義務づけられている半年間の教育実習である。一般に、大学院生の教育実習では、近隣の高校などへ出向いて日本語の授業をする（大学院レベルでの日本語教師養成科目や実習については、頼（2011）や林（2011）を参照されたい）。

一方、学部 4 年生対象の本実習は、全 12 回のコースを日本からの実習生 1 名を加えた 12 人で運営したため、各実習生が教壇にたったのは、わずか 1 回である。日本語教師養成という観点から見れば、全く十分な教壇実習とは言えない。しかし、本実習の特異な点は、むしろ実習生自身がゼロからコースを開設し、学習者募集の方法から実施、学習者との事務連絡まで全て自分たちで議論し、行ったことにある⁸。これらの作業を通し、筆者は道具的・対人的・システムのコンピテンシーがバランス良く伸びることを期待した。

具体的には、実習生達は手分けをして募集ポスターやメールの作成、募集活動、応募者の管理や登録後の授業概要説明などに取り組んだ。コ

⁷ 学習者は全部で 20 名受け付けたが、授業は夜間に行われたため欠席者も目立った。実質出席者数は、平均 12～15 名程であった。

⁸ 日本からの実習生は、カリキュラム設計や学習者募集の過程には参加していない。

ンピテンシーの観点から言えば、募集ポスターの作成では主に画像や図表作成能力（道具）の、応募者の管理では情報処理能力（道具）とスケジュール管理能力（対人）の、そして授業概要説明の文書作成を通して母語のコミュニケーション能力（道具）の訓練になると考えた。

また、教案・教材作成は、2～3回の授業で一区切りになるようなカリキュラムにしたため、2～3人でグループを組んで取り組んだ。これにより、教案の分析・総合能力やプランニング能力、日本語教育の基礎知識、wordやPPTでの図表作成能力（以上、道具）、知識を実践に適用する能力、新しいアイデアを生み出す能力（以上、システム）などの訓練と同時に、グループ作業を通して批判的能力やチェックワーク、対人スキル、責任感など（以上、対人）も伸ばせると見込んだ。

教案完成後は、模擬授業を繰り返し実施し、実習生同士で批評しあうことで、批判的・自己批判能力や対人スキル（対人）を育てることを目指した。

実習授業中、教壇に立たない実習生は、交替でビデオ撮影係と実習記録係を担当した。記録係にはMoodle⁹上に写真入りの実習ブログを作成させ、図表作成等（道具）のスキル向上を目指した。また、学習者が教室活動をする時は、見学の実習生にも積極的に学習者の指導に入るよう指導し、対人スキル（対人）や自立的に働く能力、リーダーシップ（以上、システム）の向上を期待した。

卒業制作とは、本来4年生の学生が主体となって取り組むものであり、また本実習はまだ1年目でカリキュラムには手探りの部分もあったため、実習開始当初より、筆者は実習生に新しいアイデアややってみることがあれば積極的に提案し、授業内外で自主的に行動するよう促していた。そのための一つの方策として、SNS上にグループを作り、課外での連絡や打ち合わせに利用した。次節では、このSNS使用状況をデータに、上述の形式による実習を通して、実習生達の実習参加態度が時間の経過とともにどのように変わっていったのかを検証する。

4. SNS使用状況から見た実習生の実習参加態度の変化

⁹ オープンソースのeラーニング（学習管理）システム。

前述の通り、本実習で利用した SNS は Facebook(以下、FB)である。
表 4～6 は、第 1 学期が始まった 9 月から第 2 学期の終わった 5 月までに、教師と実習生がどれくらい FB グループを利用し、その利用方法が時間とともにどう変わったのかを示している。

表 4 からわかるように、教師は年間を通して継続的に投稿しているのに対し、実習生は 11 月から投稿が増え始めて 12 月に劇的に増加している。また 1 月は冬休みのため投稿が減るが、第 2 学期が始まり本格的な実習授業が始まった 2、3 月にも投稿数が著しく増えている。

表 4 FB「日本語教育実習グループ」上の投稿数の推移（単位：回）

	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月
教師	3	7	11	14	6	12	9	6	5
実習生	0	1	3	31	1	8	10	1	1
その他 ¹⁰	0	0	0	0	0	7	1	0	0

表 5 教師の FB 投稿内容とその推移（単位：回）

	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	合計
会話四の授業内容関連	1	4	7	9	3	3		1		28
授業課題（レポート）関連	1		3	2			2	1	5	14
実習授業の生徒募集関連				3						3
冬休みの集中模擬授業関連					2					2
実習授業関連						5	5	2		12
就職情報関連	1	2	1					2		6
その他		1			1	4	2			8
合計	3	7	11	14	6	12	9	6	5	73

¹⁰ その他とは、3 月に 2 週間淡江大学で日本語教育研修をした日本からの学生である。

表 6 実習生の FB 投稿内容とその推移（単位：回）

	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	合 計
授業課題（レポート）関連				1						1
他機関の授業見学関連			2	2						4
教案・教材関連			1	2		7				10
実習授業の学習者募集関連				26						26
冬休みの集中模擬授業関連					1					1
実習授業関連						1				1
実習日誌・DVD作成関連							7	1	1	9
その他		1					3			4
合計	0	1	3	31	1	8	10	1	1	56

表 5 と 6 により、教師と実習生の投稿内容を検証すると、次のようなことが明らかになる。教師の投稿で一番多いものは、会話四の授業に関する連絡事項（次回授業内容の確認や前週の反省等）で、次が課題レポートに関する連絡や確認である。また「実習授業関連」という項目が 2 月以降に急に増えるが、これは実習授業の教室が毎回変更されたため、その連絡のための投稿であった。

一方、実習生の投稿内容の特徴は、12 月の「実習授業の学習者募集関連」で、合計 26 回もあった。これは、実習生達が学習者募集のためのポスターやメール、課程説明文書、学習者アンケート等、自分の担当文書の下書きを作成する度に FB に投稿し、積極的にクラスメートと議論しながら完成させたためである。特に、学習者募集に関する教師から

の投稿は 3 回しかなかったことを鑑みても、この点に関しては実習生が主体となって活動したことが伺える。

しかし、実習生達が最初から積極的に FB 上で議論をしたわけではない。最初の 2 回の投稿（募集ポスターと募集メール作成者による下書きの投稿）に対して、誰からも反応がなかったことを受けて、筆者が「きちんと意見を出すように」と投稿で注意している。これ以降、ポスターやアンケートに対して実習生同士によるデザインやフォーマット修正が盛んに行われるようになった。特に、実習生達が時間を費やしたのが、中国語によるメールや課程説明文書の作成である。日本語専攻の学生達は、それまで中国語で正式な文書を書く訓練を受けたことがほとんどないという。そのため、例えば課程説明文書の下書きに対し、ある実習生から「念起來有點卡卡（読んだところ少し滑らかじゃない）」という反応があり、それを契機に全 10 回の書き直しが行われた。結局、初稿では日本語教育実習課程ができた由来について、2 行強の簡単な説明のみであったものが、最終稿では 7 行にわたる詳細な説明が加えられた。他にも、自分達の呼び方（「授課老師」か「授課學生」或いは「教育実習生」か）や語彙選択（例「希望」か「期望」か）など細かい表現についての議論も見られた。

また、11 月と 12 月に「他機関の授業見学関連」で合計 4 回の投稿がある。これは、授業の課題として各自に 1 回ずつ課した淡水社区大学の日本語授業見学に関する投稿である。そのうち 2 回は、最初に見学に行った実習生からの投稿で、見学前に見ておくべき日本語ビデオの紹介と、担当教師に事前挨拶に行くよう他の実習生に促す内容であった。3 回目は、初めて見学に行く実習生からの見学場所の問い合わせだった。興味深いのは 4 回目の投稿で、別の実習生による社区大学成果発表会への参加者募集であった。実は、数人の実習生が、自主的に社区大の教師と交渉して、引き続き毎週見学に行き、成果発表会のために日本語の歌と踊りの指導を手伝っていたのである。そして、最終的に 4 人の実習生が社区大の学生達と一緒に成果発表会にも参加した。これは筆者のねらいであった、学生が主体となって活動する実習がまさに形となったよい例である。

また、教師の投稿内容には含まれず実習生からの投稿しかなかった項目に、「教材・教案関連」がある。これは、実習生が自分の担当する課で使える教材（日本語の歌等）をFBに投稿して教師やクラスメートからの意見を募ったり、学習内容を調整するためお互いの教案を見せ合ったりしたためである。さらに、実習授業の中盤から終盤（3～4月）にかけては、実習記録ブログ作成に使う為の写真の投稿や、卒業制作作品となるDVDの作り方をクラスメートに教授するための投稿も見られた。

本節では、課外の連絡に利用したFBグループへの投稿状況から、実習生達の実習参加状況の変化を探った。その結果、実習課程が始まったばかりの9、10月は教師から授業に関する連絡を受けるだけの受身な姿勢であった実習生が、実習授業の具体的な設計が進むにつれて、自主的に計画に携わる自律した実習生へと変化して行った過程が伺える。また、課外の教育活動にも積極的に参加する実習生も現れたことが確認できた。コンピテンシーの観点から言えば、自律的に活動する力、すなわちシステムのコンピテンシーが実践されたと言えるであろう。

5. 実習課程終了後のアンケート結果

本実習終了後、実習生達に実習成果を振り返るアンケートを実施した。アンケートの質問項目は、松下（2007:104）で報告されている30の一般的コンピテンシーと曾・落合（2012:38）による淡江大学日本語文学科卒業制作との対応表を参考に作成した（表7）。30のコンピテンシーの中には、抽象的な表現も含まれているため、本教育実習の内容に合わせて具体的な表現に変えたものもある。例えば、道具的コンピテンシーの中に「基礎的な一般知識」と「職業の基礎知識」があるが、前者は漠然としてわかりにくく、また教育実習という本課程の性質を考え、アンケートでは「日本語教師という職業に対する基礎知識」（項目3）とした。また、「基礎的な計算技能」と「情報処理スキル」に関しては、本実習の中では特に教案・教材作成時のスキルに当てはめ「wordやPPT等を使った資料作成技術」（項目6）に置き換えた。対人的コンピテンシーの中の「倫理的な関わり」という表現もわかりにくいため、具体例としてあげられている「責任感と時間管理」（項目11）という形に変え

た。システムのコンピテンシーの「質への関心」と「成功しようとする意思」は、どちらも高いレベルの成果を目指すことと捉え「向上心」（項目 19）と言い換えた。

また、台湾人学習者を対象とした今回の実習では、「学際的なチームで働く能力」、「他分野の専門家とコミュニケーションする能力」、「多様性と多文化性を認めること」、「国際的な場面で働く力」（以上、対人）、「他国の文化と習慣の理解」（システム）というコンピテンシーはあまり当てはまらないためアンケートには含めなかった。同じく、「プロジェクトのデザインと運営¹¹」、「イニシアティブと企業家精神」（以上、システム）も、本実習にはそぐわないと判断し、該当する項目を設けなかった。

表 7 一般的コンピテンシーとアンケート項目の対応表

一般的コンピテンシー	アンケート質問項目
<ul style="list-style-type: none"> 分析と総合の能力 	1) 物事を分析し総合的にまとめる力
<ul style="list-style-type: none"> 組織化とプランニング能力 	2) 物事を組織したり計画を立てたりする能力
<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な一般知識 職業の基礎知識の習得 	3) 日本語教師という職業に対する基礎知識の習得
<ul style="list-style-type: none"> 第二言語の知識 	4) 日本語や日本文化に関する知識の習得
<ul style="list-style-type: none"> 母語の話し言葉・書き言葉によるコミュニケーション能力 	5) 中国語による話し言葉・書き言葉でのコミュニケーション能力
<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な計算技能 情報処理スキル 	6) Word や PPT 等による資料作成技術
<ul style="list-style-type: none"> 問題解決 意思決定 	7) 困難に当たった時の問題解決や意思決定能力

¹¹ DeSeCo プロジェクトの説明に「人生計画と個人的なプロジェクトを設計し、実行する力」とあるように（表 1 参照）、この場合の「プロジェクト」とは大きな人生の展望の中で目標を達成するために計画を立てることである。本教育実習では、各実習生の人生計画に合わせて自由に活動をプランさせるような機会是与えていないため、このコンピテンシーは除外した。

• チームワーク	8) チームで協力して仕事をする能力
• 批判的・自己批判能力	9) 批判的に他者や自分の行動を観察・判断する能力
• 対人スキル	10) 他者に自分の意志を伝える能力
• 倫理的な関わり	11) 責任感・時間管理
• 知識を実践に適用する能力	12) 学んだ知識を実践に適用する能力
• リサーチのスキル	13) 調査能力
• 学習する能力	14) 新しいことを学ぶ能力
• 新しい状況に適応する能力	15) 新しい状況に適応する能力
• 新しいアイデアを生み出す能力	16) 新しいアイデアを生み出す能力
• リーダーシップ	17) リーダーシップ
• 自律的に働く能力	18) 自律的に働く能力
• 質への関心	19) 向上心
• 成功しようとする意思	

全部で19にまとめられた質問項目に対し、本実習がどの程度これらの能力の訓練になったと思うかについて、1（全く思わない）から5（非常に思う）までの5段階評価で回答を得た。さらに回答が4、5（（訓練になったと）思う／非常に思う）の場合は、具体的にどのような場面や作業が訓練になったかを自由記述させた¹²。回答は表8の通りである。Turning Projectのカテゴリーに照らし合わせると、質問1～7番が道具的コンピテンシー、8～11番が対人的コンピテンシー、12～19番がシステムのコンピテンシーに該当する。以下で、各コンピテンシー別に分析結果を整理する。

¹² 自由記述は、日本語と中国語どちらでも可とした。

表 8 実習生へのアンケート結果（単位：人）

	5-非 常に 思う	4-思 う	3-ど ちら でも ない	2-思 わな い	1-全 く思 わな い	平均ポ イント (点)
1) 物事を分析し総合的にまとめる力	4	5	2	－	－	4.18
2) 物事を組織したり計画を立てたりする能力	9	2	－	－	－	4.82
3) 日本語教師という職業に対する基礎知識の習得	8	3	－	－	－	4.73
4) 日本語や日本文化に関する知識の習得	2	2	7	－	－	3.55
5) 中国語による話し言葉・書き言葉でのコミュニケーション能力	3	1	7	－	－	3.64
6) Word や PPT 等による資料作成技術	7	2	2	－	－	4.45
7) 困難に当たった時の問題解決や意思決定能力	6	2	3	－	－	4.27
8) チームで協力して仕事をする能力	5	4	2	－	－	4.27
9) 批判的に他者や自分の行動を観察・判断する能力	5	4	2	－	－	4.27
10) 他者に自分の意志を伝える能力	4	3	4	－	－	4
11) 責任感・時間管理	6	5	－	－	－	4.55
12) 学んだ知識を実践に適用する能力	7	3	1	－	－	4.55
13) 調査能力	3	4	4	－	－	3.91
14) 新しいことを学ぶ能力	3	3	4	1	－	3.73

15) 新しい状況に適応する能力	5	4	2	—	—	4.27
16) 新しいアイデアを生み出す能力	10	1	—	—	—	4.91
17) リーダーシップ	3	1	7	—	—	3.64
18) 自律的に働く能力	3	5	3	—	—	4
19) 向上心	3	7	1	—	—	4.18

5.1 道具的コンピテンシー（1～7番）

平均ポイントが4以上のものを高い評価、4.5以上を特に高い評価と判断した場合、2番「物事を組織したり計画を立てたりする能力」と3番「日本語教師という職業に対する基礎知識の習得」が特に高いポイントを獲得している。後者に関しては当然の結果であるが、前者については、実習生全員が教案作成を通して訓練になったと答えている。

その他に高いポイントを得た項目が、6番「wordやPPT等による資料作成能力」、7番「困難に当たった時の問題解決や意思決定能力」、1番「物事を分析し総合的にまとめる力」である。具体的には、6番は教材のPPTを作った時という回答が一番多かった。実際、1度目の模擬授業に対する筆者からのコメントには、7人の実習生に対してPPTに対する何らかの批評（1ページ当たりの情報量が多すぎる・少なすぎる、文字サイズが不適切など）があり、何度も作り直しをした実習生もいたようである。7番は授業中に学習者から質問が来た時や教案通りに授業が進まなかった時、1番は今までの知識を統合して教案を作った時という回答が目立った。

一方、4番「日本語や日本文化に関する知識の習得」と5番「中国語による話し言葉・書き言葉でのコミュニケーション」については、あまり高い結果が得られていない。前者については、実習授業が日本語を一から教える初級レベルで、文法シラバスを中心としたカリキュラムだったために、実習生にとって高度な文法や日本文化を教える機会がなかったことが原因であろう。5番については、前節で中国語の文書作成に実習生たちが苦労したという観察結果を述べたが、意外にもこの能力について4、5ポイントと答えた4人の実習生は、文書作成担当以外の者で

あった。その理由については 4 人とも、中国語で日本語の文法などをいかにうまく説明するか、および学生とのコミュニケーションを通して、と答えており、この実習においては書く能力よりも話す能力の方が実習生達に重視されていたことが伺える。

それでも、物事の組織力・計画力、資料作成能力、問題解決・意思決定能力等は、様々な分野の職業に求められる力であり、道具的コンピテンシーに関しては、比較的よい効果があったことが認められる。

5.2 対人的コンピテンシー (8～11 番)

対人的コンピテンシーに関して特に高いポイントを得た項目は、11 番の「責任感・時間管理」である。具体的には、実習授業の際に時間配分に気を配ること、教師として授業に遅刻しないこと、提出に遅れないよう課題に取り組むことなどを通して訓練されたという回答であった。特に遅刻に関しては、会話四は朝一番の授業であったため、開始当初は遅刻をする学生が目立った。そのため、筆者は 11 月に一度、授業中と FB 両方で「たとえ実習生であっても教壇に立てば教師であり、教師の遅刻はありえない」という厳しい注意をした。それ以降、遅刻する学生はいなくなり、実習授業では教壇に立たない実習生もほとんどが 10 分以上前に教室に入って準備を手伝うなど、時間管理に対する意識の高さが観察された。

その他の項目「チームで協力して仕事をする能力」や「批判的に他者や自分の行動を観察・判断する能力」、「他者に自分の意志を伝える能力」も、全て高いポイントであった。やはり 1 年を通してチームで取り組む実習は、対人的コンピテンシーのよい訓練になったと言える。

5.3 システム的コンピテンシー (12～19 番)

システム的コンピテンシーについては、12 番「学んだ知識を実践に適用する能力」と 16 番「新しいアイデアを生み出す力」が特に高かった。前者は、これまで学んだ日本語の知識や 3 年生の日本語教授法で学んだ理論を実践で使った点が訓練となったという回答であった。最もポイントの高かった 16 番には、実習生全員が、楽しくわかりやすい授業になるよう教室活動を工夫した点と答えている。

しかし、全般的にはシステムのコンピテンシーに、ポイントが低めの項目が目立っている¹³。具体的には、「調査能力」、「新しいことを学ぶ力」、「リーダーシップ」が低めの評価であった。前者2項については、それまでに学んだ知識を実践に応用する実習という性質上、訓練しにくい能力ではある。しかし、例えばコース開始直後に教師主導で指導した日本語教師の心得や、カリキュラム・シラバスデザイン等の講義を、実習生が調べて発表するという形に変えることで、これらの能力の訓練ができるであろう。「リーダーシップ」に関しても、チームで活動する限り自然とリーダー的役割を担う者とそれに追従する者に分かれてしまうのは避けがたいが、今後は活動ごとに違う実習生をリーダーとして指名するなど、何らかの形で多くの実習生にリーダーの役割を経験させるような方法を考える必要がある。

6. おわりに：卒業制作としての日本語教育実習の可能性と課題

本報告では、淡江大学日本語文学科の卒業制作の一つである日本語教育実習の成果を、キャリア教育のコンピテンシーの観点から論じた。実習生が協力して初級日本語コースをゼロから立ち上げ運営した本実習において、課外の連絡に利用した SNS の利用状況からは、実習生の自律して活動する力が発達して行った様子が伺えた。また、実習後のアンケートからは、本実習が特に対人的コンピテンシーと物事の組織力・計画力、時間管理・責任感、新しいアイデアを生み出す力等の道具的コンピテンシーの訓練になったと感じていることが明らかになった。一方、システムのコンピテンシーに関しては、さほど成果を感じていない項目も多いので、この分野の訓練も盛り込んだ実習を設計することが今後の課題である。

今回の調査では、実習生が教育実習を卒業制作に選んだ動機は考慮せずに分析を行ったが、動機が実習参加態度に影響を与えるということもあり得ることである。この点に関しては、今後の研究でさらに追究し

¹³ この結果は、一見4節の結果と矛盾しているが、アンケートの18番「自律的に働く能力」は比較的高いポイントを得ている。同時に、実習生の実際の行動と内省には隔たりがある可能性も考えられる。この点に関して、授業実践報告ではしばしば学習者アンケートが用いられるが、学習者の内省のみに頼る研究手法の妥当性を再考するべきであろう。

たい。さらに、今後はルーブリックを用いる等して、コース途中で実習生自身がコンピテンシーの訓練成果を確認しながら取り組めるような形にすると、実習の成果や達成感がさらに強まるであろう。最後に、今回は筆者の担当した教育実習でのコンピテンシー訓練に限って報告したが、将来的には他分野の卒業制作に取り組んだ学生にも同様の調査を行い、淡江大学日本語文学科の卒業制作分野ごとにどのようなコンピテンシーの訓練になるのかを明らかにし、今後のキャリア教育の発展に貢献したい。

付記

本稿は、2014 年 12 月 20 日に淡江大学で行われた「2014 年度台湾日本語文學國際學術研討會—学習者急減期における台湾の日本語教育を考えて—」で発表した内容に加筆修正したものである。

本論文於 2015 年 4 月 14 日到稿，2015 年 5 月 4 日通過審查。

参考文献

- 工藤真弓（2011）「新しい学力観：キー・コンピテンシー定義からの考察（１）」『四条畷学園短期大学紀要』44、p. 1-6
- 呂惠莉（2012）「日本語教師養成専門科目におけるコース・デザインの試みー「日語教學法」を例としてー」『台灣日語教育學報』18、p. 114-142
- 松下佳代（2007）「コンピテンス概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点ーTurning Project の批判的検討ー」『京都大学高等教育研究』13、p. 101-120
- 林長河（2011）「台湾における日本語専攻の大学院の日本語教師養成に関する一考察ー日本語教育の学術領域とカリキュラムをめぐってー」『台灣日語教育學報』17、p.57-86
- 曾秋桂・落合由治（2012）「技能実践学習としての「卒業制作及び指導」の成果と課題ー淡江大学日本語文学科を事例研究対象としてー」『台湾日本語教育學報』19、p. 24-53
- 頼錦雀（2011）「台湾における日本語教員養成ー東呉大学の事例を中心にー」『東呉日語教育學報』36、p. 53-75